

熊大通信

Kumamoto University Campus Magazine

2026
SUMMER
vol. 96



特集Ⅰ

続く、進化

～もっと前へ、その先へ。
熊本大学が拓く、新しい学修モデル

特集Ⅱ

熊本大学の防災・減災研究最前線



熊本大学広報誌
熊大通信 vol.96
2026 SUMMER
Kumamoto University Campus Magazine

- 01 ― 薬草ミュージアム
世界各地の薬用植物標本が並ぶ、
熊本大学薬学部「薬草ミュージアム」
- 03 ― 特集Ⅰ
続く、進化
～もっと前へ、その先へ。
熊本大学が拓く、新しい学修モデル
- 11 ― 特集Ⅱ
熊本大学の防災・減災研究最前線
- 17 ― 研究室探訪
脳はなぜ、記憶したり忘れたりできる？
DNA・RNAの特殊構造体から
疾患の解明を目指す
―熊本大学発生産医学研究所 塩田研究室
- 19 ― 卒業生ジャーナル
- 21 ― 熊本大学
プロモーション動画
熊本大学映画研究部が
熊本大学のPVを制作！
- 22 ― 熊本大学基金よりお知らせ
- 23 ― キャンパスミュージアム散策「大医は国を医す。」

- 【発行】 国立大学法人 熊本大学
〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪2-39-1
【総務部総務課広報戦略室】
Tel.096-342-3119 Fax.096-342-3110
sos-koho@jimu.kumamoto-u.ac.jp
- 【編集】 熊大通信編集委員会
濱田 絵美／委員長 広報担当副理事
(大学院人文社会科学研究部(法学系)准教授)
宮尾千加子／理事(非常勤／広報・ブランディング・行政連携担当)
松岡 浩史／大学院人文社会科学研究部(文学系)准教授
大蔵 将史／大学院人文社会科学研究部(法学系)准教授
山田 勝雅／大学院先端科学研究部(理学系)准教授
寺崎 秀紀／大学院先端科学研究部(工学系)教授
中村 五月／大学院生命科学研究部(保健学系)准教授
倉内 祐樹／大学院生命科学研究部(薬学系)准教授
松永 拓己／大学院教育学研究科美術科教育 教授
日野沢勇也／総務部総務課副課長(広報戦略室長)

【制作】 株式会社城野印刷所
※記載されている職名や学年等は、取材時のものです。

世界各地の薬用植物標本が並ぶ、熊本大学薬学部「薬草ミュージアム」

肥後藩主・細川重賢公が開設した薬園「蕃滋園」を源に持つ、長い歴史を有するのが熊本大学薬学部です。明治に入り薬学校が設立されて以来、薬剤師の養成に尽力。昭和になっていち早く創薬を学ぶ学科を創設したのちは、多くの研究者も輩出し、様々な最先端研究が進められています。

その中で力を入れている一つが薬用植物研究です。大江キャンパスにある「薬草ミュージアム」には、世界各地から集められた薬草の標本がずらり。加えて、薬草が描かれたチベットの曼陀羅をはじめ、薬草の原産地である国々の民芸品などが飾られています。世界にはどんな薬草があり、どう利用され、私たちの未来をどう変えてくれる可能性があるのでしょうか。知識欲を満たしつつ、熊本大学の薬用植物研究に対する熱い思いを感じられるミュージアムです。



続く、進化

もっと前へ、その先へ。

熊本大学が拓く、新しい学修モデル

近年、稀有な勢いで様々な新しい取り組みを進めている熊本大学。
その勢いを止めることなく、
令和8(2026)年度にスタートしたのが熊本大学9つ目の学部である共創学環です。
そのほか、同じく今年度スタートした、1学科制を導入した文学部、
佐賀大学との共同教員養成課程を新設した教育学部、
そして、教育学部附属小学校に新設された国際クラスをご紹介します。

より良き社会を創る力を、学生たちへ

日本では、地方創生という言葉が使われ始めて10年以上が経過。その中で、地方創生とは行政の役割だという認識が変化し、今は企業も参画し積極的にそれに取り組むようになっていきます。その理由は、企業活動の継続は地域の活力を抜きには実現できないこと。そして、社会や地域課題の解決を自社の存在意義として掲げることが企業価値を上げ、消費者の購買行動を変え、さらには、より良い人材の獲得につながるからです。

しかし、地方創生は一企業や個人が単独でできるものではありません。そこで求められるのが、企業や自治体、地域や人々、異分野をつなぐ「横ぐし」になれる人、つまり「共創」ができる人材です。これまでにないアイデアや技術を創出し社会を変革するイノベーターになることもできますが、それは非常に難しい。しかし、そのイノベーターを育て支える行政職員や企業の一員として「横ぐし」になり、「共創」で社会や地域の課題解決を担うことは可能。それができる人材を育成するのが、本年度スタートした共創学環です。

そして、今年度の新設された文学部1学科制、教育学部の共同教員養成課程、そして教育学部附属小学校の国際クラスも、掲げる目標は共創学環と同じ。社会に貢献でき、かつ、困難が立ちはだかっても強く生きる力を学生や子どもたちに育むことです。そのために熊本大学は、今もこれからも、「進化」の歩みを決して止めることはありません。



共創学環

今社会に求められている、
地方創生をローカルおよびグ
ローバルに担える人材を
育成するのが共創学環です。

チーム型学修と文理融合で 課題解決の「即戦力」を育成

実践的データサイエンスや
経営マネジメントを学修

熊本大学 副学長
共創学環長
金岡 省吾 教授
Shogo KANAOKA



教育の現場では今、高校時代から「総合的探究」という時間が設けられ、地域課題をテーマに様々な学習が提供されています。その学びを中断せず大学でさらに発展させ、学生たちがいよいよ社会に出る時に、地域課題をローカルにもグローバルにも解決できる即戦力となる人材を育成するのが共創学環です。

大きな特徴の一つが、文理融合。たとえばデータサイエンスを扱いますが、そのデータをどう活用するか、どちらかという文系寄りの学問です。企業やシンクタンクなどが取り組むのと同じ、実践的なデータサイエンスを学びます。加えて、経営・マネジメントのほか、多文化共生やコミュニケーション分野、そして、人文科学や公共政策、自然科学科目等も配置し、幅広い知識と視野を持つ人材を育成します。

そしてもう一つ、共創学環が武器としているのが、自治体や、金融機関をはじめとした企業が参画してくれていること。大手商社やIT企業も含め、共創学環の設立には最初から民間企業が興味を持ってくれました。学環のカリキュラムも、教員だけではなく自治体や企業とともに「共創」でつくっていますし、実際の授業に自治体や企業が入っていることも大きな特徴です。

自治体や企業とともに
学生へ様々なフィールドを準備

共創学環では、2年生で「データサイエンス・自然科学・生命科学系」「経営・経済・公共政策系」「コミュニケーション系」「多文化共生系」の4つから選んで学び、3年生から「地域イノベーションコース」と「グローバルイノベーションコース」という専門コースを選択します。

このうち、地域イノベーションコースでは、地域の課題解決に取り組む自治体や、銀行をはじめとした民間企業などが参画する地域課題解決実践プログラムを提供。ここで、高校で見つけてきた地域課題に引き続き取り組んでもらうこともできますし、大学で新たに課題を発見し、新たに解決に取り組んでもらうこともできると思います。一方グローバルイノベーションコースは、もともと文学部にあったコミュニケーション情報学科と、以前設置されていたグローバルリーダーコースの発展形です。これらの学科およびコース卒業者はグローバルに強く、商社などの企業からも引く手あまたでした。地方創生は日本に限ったことではなく、海外諸国にも共通する課題です。地域課題をグローバルに解決する能力を養うのがこのグローバルイノベーションコースです。

どちらのコースも3年生ではインターンシップが準備されており、そのプログラムも、参画してくれている自治体や企業とつくっていきます。学生たちは、社会人が学ぶリカレント教育の場に参画してもかまいません。共創学環はそういった様々なフィールドを用意していますので、そこでチーム型の学習をしてもらい、自分の関心や思いを社会課題解決につなげて成長し、卒業後、即戦力として社会で活躍してほしい。1期生も、これから続く学生たちも、私たち熊本大学、そして産学官金が本気で支えています。

人口減と世界企業の進出
両端を目の前で学べる熊本

熊本は、多くの地方自治体と同じく人口減という課題を抱えています。しかし同時に、半導体の世界企業が進出し活性化するという、その両方が見られるまたとない場所。学びと実践の場としては最先端であり、学生にとっても貴重な学びの場だと考えています。

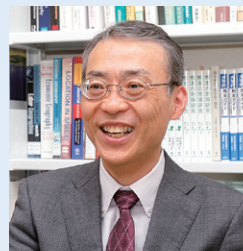
今年度入学した1期生が、これからどう成長してくれるのかは未知数です。しかし、共創学環の歴史をつくっていくのは間違いなく彼らであり、彼らがこの学環の羅針盤となる。彼らの成功も失敗も伝統になっていきます。失敗は怖いことですがだからといって受け身にならず、積極的にいろいろな場所に飛び込んで成長してくれることを期待しています。

共創学環3年次より選択する、2つのコースを紹介します。

■地域イノベーションコース

実際に地域に出向き
様々な人と協働する実践的学び

鹿嶋 洋教授
Hiroshi KASHIMA



地域イノベーションコースは、社会課題の中でも地域に着目した課題の解決に資する人材を育成することを目的としています。たとえば九州内でも、福岡県のように人口が増えている地域もあれば減少している地域もある。持続そのものが厳しい地域もあります。そんな地域が直面する課題を、実践的学びを通して理解し、解決する。地域の課題は複雑で様々な人が関わりますから、その中で力を合わせて取り組んでいける力を養います。このコースの特徴の一つが、3年生での地域共創プロジェクト演習。いろんな地域にでかけていき、実際に地域課題解決に携わる方々の話を聞くだけでなく、インターンシップも含め一緒に活動をする演習です。インターンシップには、地域創生に力を入れている様々な企業も協力してくださっています。

今年度入学した1期生は、私から見ると本当に「キラキラ」しています。共創学環の入学式では、初対面同士で緊張しているかと思いきや、もうワイワイガヤガヤと楽しそうに話していて、すばらしいと感じました。周りの人とのコミュニケーションを積極的に楽しめる彼らが、実際のフィールドで地域の人たちと交わったとき、いったいどんなことが起こるのだろうと今から本当に楽しみにしています。

■グローバルイノベーションコース

留学を含めた
海外研修を積極支援

平野 順也教授
Junya HIRANO



グローバルイノベーションコースの大きな特色が、留学を含めた海外研修に対するサポートの手厚さ。一般的に、大学での長期留学は、2年生で申請し1年間準備し、3年生で留学となります。しかしそれでは帰国が4年生の初めごろとなり3年生で行う就職活動ができず、卒業に5年かかることも少なくありません。グローバルイノベーションコースでは留学希望者に1年生のうちからしっかりと準備をしてもらい、2年生の後期から留学できるよう支援。そうすることで、3年生の前期に帰国でき、同級生と同じスケジュールで就職活動や卒業ができるようにしています。もちろんそのほかにも、短期留学や海外の語学学校研修、国内における外国人支援、熊本のプロスポーツチームの海外への広報などを通したグローバル研修なども支援しています。

学生たちは、たとえばSDGsの達成が重要だとは学んでいますが、実社会でどれだけ達成できているかなどは把握しておらず、学んだ知識が彼らの行動や考え方に直結しているかは疑問だと思っています。共創学環で私たちが育成したい人材はまさに「行動力があり、信念をきちんと持っている人」。自分は何に興味があって、社会のどこに対して貢献できるのかを発見し、行動に移せる人になってほしいです。共創学環は、学生たちの興味や生きがいを見つけ、開発していく場所になりたいと考えています。



「協働」の力を磨く共創学環 とにかく、 いろんな人と関わることが魅力！

共創学環1期生のお二人が、
学環への期待と将来の夢を語ってくれました。

皆さん、こんにちは！
僕の名前は健児くんです。いつもは熊本大学のウェブ
マガジン「熊大タイムズ」でリポーターをしています。
今回は、共創学環の1期生である学生さんお二人に、
僕がお話を伺いました。



中学・高校時代の経験が 共創学環へとつながった

——お二人は、なぜ共創学環に進学を？

小野さん 僕は東京生まれの東京育ちなのですが、「地域未来留学」という、国内留学制度を使って宮崎県えびの市の高校に通ったんです。そこで、えびの市が大好きになって、こんな場所をなくしたくないと思って地域創生に興味を持つようになり、将来、地域創生に関わる仕事をするためにいろんな知識や経験を得たいと思ったことが進学の原因です。

野田さん 私は、多文化共生やコミュニケーション、そしてリーダーシップを学べることが魅力で共創学環を選びました。将来の夢は、開発途上国で、その国の文化や課題に応じた教育支援や教育の基盤づくりをすること。そんな夢を持つきっかけになったのが、中学生の時に社会科の授業で見た、経済的事情で学校に通えないネパールの女の子の話です。私は5人兄弟姉妹の長女ががまんしないといけないこともあって、共感を覚えました。途上国の課題は私の事情よりずっと深刻ですが、他人事と思えなかったんです。

——共創学環はまさに、お二人のような夢を持つ人にぴったりですわね。

野田さん 3年生になったらグローバルイノベーションコースを選ぶつもりです。海外フィールドワークがあるから、チャンスがあれば行きたいのがネパール。実際に行って、現地の人の考えを聞いたり、教育を受けられない子どもたちの状況を知りたいです。でも、その前にまずは英語力を磨きたいから、英語圏への留学もしたいと思っています。

小野さん 私は3年生から地域イノベーションコースを選択する予定。このコースでは、自分の興味がある地域に行き、自分で課題を分析し、企画から実践までやれるんです。それがすごく楽しみだし、何より、自分一人でするのではなく、いろんな人と関わりながら学べることに期待しています。

協力し合う力や 臨機応変な対応力を磨きたい

——フィールドワークのほかに、共創学環での学びに期待していることは？

小野さん 「協働」する力を育むカリキュラムも共創学環の特徴な



小野 祐暉さん
Yuki ONO

野田 美凜さん
Minoru NODA

んです。僕は高校生の時、えびの市のイベントに参加し、廃棄される米袋を使ってバッグを作ったり、自ら企画してくず米と呼ばれる、廃棄されるお米を使った米粉でお菓子を作り、イベントで販売したりしました。一人でやるつもりだったけど、結局はくず米を提供していただいた生産者やイベント出店の手助けをしてくれる人たち、米粉のお菓子のレシピ提供をしてくださる方など、とにかくいろんな方の協力が必要でした。将来地域創生に仕事として関わるなら、話をもっと大きなことになり、それこそ、もっともっと多くの人と関わります。だから、人と協力し合う力は本当に大切で、この学環の4年間で養いたいと思っています。

野田さん 私の故郷である熊本県球磨郡のあさぎり町には、90年ほど前に社会人類学者の外国人夫婦が1年間暮らしていたことがあるんです。彼らは研究のために来ていましたが、地域にとっても溶け込んでいたと聞きました。私が将来訪れる海外の地域も、まずは地域に溶け込み地域の人々の考え方ややり方を理解しないとイケない。地域住民の目線で活動したいから、協働する力に加え、現地に行って臨機応変に対応できる力を身につけたいですね。

高校での探究活動には 本気で取り組んでみて！

——共創学環1期生であるお二人から、高校生や中学生へメッセージをお願いします！

野田さん 自分がやりたいことを見つけるのは難しいですが、その方法の一つが高校での探究活動。だから、本当に大事にしたほうがいいです。

小野さん とにかく、いろんなところに出て行って、いろんな人と関わって、考えてみるといいと思います。僕はえびの市で、とにかくお米がおいしいことにびっくりしたんです。そして、寮のみんなと行った農業体験で、くず米という商品にならないお米があると知ってこれはもったいないと。ご飯のおいしさと、解決したい課題が偶然結びついたんです。農業体験があったからそれに気づけたわけで、ラッキーだったのかもしれないけど。

野田さん そのラッキーも、自分から外に出ていかないとつかめないですよ。だから、よく言われることかもしれないけど、スマホを見る時間を減らして、人と対話することで自己理解を深めるような、自分のためになる時間を使いましょう！

～健児くんからお知らせ～
お二人のお話をもっと詳しく熊大タイムズで紹介しています。ぜひ読んでみてくださいね！



伊藤 正彦 文学部長
Masahiko ITO

学部生が主役の文学部で 貴重な経験を重ねてほしい

——まずは、文学部1学科制がスタートした背景と仕組みを教えてください。

2026年度、熊本大学では新たに共創学環が創設されました。その中のグローバルイノベーションコースが、これまで文学部の学科のひとつだったコミュニケーション情報学科の教育実績を踏まえて発展させた教育内容となっています。それに合わせ、残りの3学科を1つに統一し、「人文科学科」1学科制といたしました。1学科制では、最初の1年間は教養科目や基礎的な知識を学び、また、文章作成演習も履修。2年次より、希望に応じて9つに分かれた専門コースに所属します。

——1学科制の良さは、どんなことですか。

熊本大学文学部では長きにわたり、文学部の中に細分化された学科があるという仕組みを継続してまいりました。その理由は、それぞれの学科に対し、毎年確実に志願者がいたこと、そして、志願して入学してきた学生たちに、しっかりとした教育を行ってきた実績があったからです。しかし、大学出願時点から細分化された学科のひとつに決めることは高校生にとってハードルが高く、かつ、学科を選択して入学したものの、入ってみたらやりたかったことと違ったというミスマッチも、少なからずありました。1学科制であれば、1年生の間に概論科目などを受講したうえで、2年生になる時にやりたいことを選ぶことが可能。ある程度やりたいことが決まっている受験生もいると思いますが、大学に入って授業を受けてから新しく学びたいことが見つかる、そんな体験もしてほしいと考えています。

——教員免許の取得にもメリットがあるそうですね。

文学部では中学校と高校の教員免許が取得できます。4学科制だったときは学科による制限があり、たとえば歴史学科なら地歴の教員と決まってしまう、もし国語の教員免許を取りたいと思っても取れませんでした。しかし、1学科制なら、もちろん取得単位数は膨大になりますが、希望すれば複数の免許を取得することが可能になります。

文学部1学科制

入学後1年間、じっくりと基礎を学び 「やりたいこと」が見つけれられる！

これまで、文学部4学科の一つだった「コミュニケーション情報学科」が、より進化して共創学環へ組み込まれることとなり、残りの3学科が一つになった人文科学科の1学科制となって、文学部が新たなスタートを切りました。1学科制の特色について、伊藤正彦文学部長に話を伺いました。

——文学部で学ぶ学生に期待することは何ですか。

近年は、文学部出身者の多くが専門的な職種に就いています。資格が必要な例で言えば学芸員。実は今、文化財行政において学芸員は引く手あまたなんです。特に考古学に強いのが熊本大学文学部。学部生のうちから発掘調査をやり、調査報告書を書くという訓練をしますので、実は西日本では、熊本大学の考古学出身者を採用すれば即戦力になるという評価もいただいています。

また、マスコミ関係など、文章を書く専門職に就く学生も増えています。文学部では、調べ物をし、論理的に考える力を養い、文章を書く力を培います。情報分析力や課題解決力、人に伝える力は一般企業でも必要とされている能力。学生たちには、熊本大学文学部で身につけた力を発揮して、社会で活躍できる人材になってほしいと思っています。

——熊本大学文学部の魅力とは。

何よりも、学部生が主役の学部だということです。研究室ではどうしても大学院生が主役になりがちですが、熊本大学文学部にはそれぞれの専門分野に学生研究室があり、そこでは学部生が中心になって勉強や調査を進めています。それぞれの研究室では、新しく入ってきた学生を歓迎する会もあれば、期末試験終了時や卒論を仕上げた時のお疲れ様会もあります。そして卒業時には、研究室の後輩たちが心を込めて先輩たちを送り出してくれます。そういった行事も含め、学部生が自律的に研究室を運営。私はこの「学部生が主役」であることが、熊本大学文学部の一番の良さと自負しています。

熊本大学文学部

改組前(令和7年度まで)		改組後(令和8年度から)	
学科	コース	学科	コース
総合人間学科	人間科学コース	人文科学科	人間科学コース
	社会人間学コース		社会人間学コース
	地域科学コース		地域科学コース
歴史学科	世界システム史学コース		超域歴史学コース
	歴史資料学コース		歴史資料学コース
文学科	東アジア言語文学コース		東アジア言語文化学コース
	欧米言語文学コース		欧米言語文化学コース
	多言語文化学コース		多言語文化学コース
コミュニケーション情報学科	コミュニケーション情報学コース		現代文化資源学コース
	現代文化資源学コース		現代文化資源学コース



藤田 豊 教育学部長
Yutaka FUJITA

教育現場の課題も肌で感じ 解決できる人材を養成

——共同教員養成課程について教えてください。

この共同教員養成課程では、両大学をオンラインでつなぎ、片方の大学の授業をもう片方の大学の講義室に配信する形の共同授業を実施します。今年度は、熊本大学が140名（定員）、佐賀大学が120名（定員）、合計260名が学んでいます。

この養成課程創設の背景には、教える側である大学のマンパワー不足を、別々の大学がそれぞれの強みを生かしながら共同で授業を行い補うという、効率化の必要性があります。しかし同時に、所属する大学とは別の大学の授業を受けられる、学生側にとっても大きなメリットがあるのがこの養成課程です。佐賀大学は幼稚園教育、初等教育、そして特別支援教育に強みをもち、毎年80%を超える就職率の高さからそのノウハウを提供していただく計画です。これに、熊本大学が持つ教育に関する研究実績という強みを加え、両大学の学生たちに専門性の高い授業を提供します。

——共同教員養成課程には、新しい入試枠も創設されたと聞きました。

熊本県が持つ教育課題の中に、人口減の激しい市町村における小中学校の義務教育の継続と、海外企業の進出を踏まえた、日本の学習指導要領に沿った教育を英語で提供できる人材の育成があります。熊本大学がこういった熊本県の教育課題を解決できるように支援していくため、「地域枠」と「国際枠」という入試枠をつくりました。

今年度地域枠で入学した8名の学生たちは、球磨郡山江村の山田小学校で2週間の宿泊型教育実習に参加します。山田小学校は、過疎化が進んでも質の高い教育を継続するためのICT教育に10数年前から取り組んでいる先進校です。そこに教育学部の学生を派遣し、山田小学校の改革の実情を学びつつ、彼ら自身も教育実習生としての力を発揮してもらうことを目的としています。

国際枠で入学した5名の学生たちは、今年度から教育学部附属小学校に創設された、英語と日本語の両方で授業を行う国際クラスのような現場で教壇に立つ人材の輩出を目指しています。学生たちは、連携協定を結んでいる沖縄のインターナショナルスクールや台湾のバイリンガル教育学校で1週間から2週間の教員インターン

教育学部 共同教員養成課程

熊本大学・佐賀大学が互いの強みを生かし 質の高い教員養成を目指して

熊本大学は佐賀大学と連携し、西日本では初の試みとして共同教員養成課程をスタートさせました。その背景や養成課程の特色について、教育学部の藤田豊学部長に話を伺いました。



佐賀大学と合同で行われた開講式。共同授業も、講義室の大きなスクリーンに佐賀大学の講義室が映し出される形で行われています。

シップに参加します。

——全国的には、どのような教育現場の課題があるのでしょうか。

現在は、多様な子どもたちそれぞれへの対応が、学校教育にかかわる教員にとっては課題の一つとなっています。特別支援が必要な子どもさんや不登校の子どもさんが増えていますから、彼らを受け止めて対応できる力量が必要です。さらに、この多様性の中には外国籍の子どもや海外経験のある子どもたちも含まれます。彼らに日本の学校教育に慣れてもらうだけでなく、母語が異なる子どもたちが授業に不自由なく参加できるよう、先に説明したような日本語と英語によるイマージョン教育の方法による、新しい教育システムを構築することも不可欠です。

こういったローカルな課題とグローバルな課題は、切り離して考えることはできません。地域課題に国際的な問題はあはるし、国際社会の中にも熊本にあるような地域課題と共通する問題があります。様々な視点からそれらを見て解決できる人材になれるよう、学生たちの学習の質を高めていけたらと考えています。

——教員を志す学生へ、メッセージをお願いします。

やはり、座学だけでこの養成課程の学修は完結しません。実践の中でそこにある課題を肌感覚で理解して、その解決策を大学での仲間や教員とのディスカッションを通して考えていく。実践と理論の往還が不可欠です。

本学部の学生が教育実習をさせていただく小中学校では、学校現場で教員を育てたいという思いで指導される先生方が数多くいらっしゃいます。そんな先生方からのメッセージを受け取りながら実習で学ぶ学生たちは、「教員になりたい」という思いをきっとより強く持てるようになるはず。一方で、教職科目と教科専門科目の研究実績がある研究者も多数在籍しているのが熊本大学ですから、実習という実践と、研究をベースとした理論との往還。これらの学びを通してどんな環境でも教員の仕事を全うする自信を持ってくれば、教員になることへの不安も払しょくできるはず。そうやって、教員となる夢をぜひ叶えてほしいと思います。



塩村 勝典 校長
Katsunori SHIOMURA

英語で教科指導を行う イマージョン教育が柱

——国際クラスとはどのようなクラスなのでしょうか。

一般クラスとは別に設置された、日本の学習指導要領に基づいて、国語と道徳以外の教科をすべて英語で実施するクラスで、英語によるイマージョン教育を実施しています。イマージョン教育とは、子どもたちを外国語に浸す（immerse）ことで、教科と言語、両方の能力を同時に育成するもの。本校の国際クラスでは、英語能力の習得に加えた教科等の学びの充実を目指しています。

クラスは日本人および外国人の児童からなっており、日常の中で英語を使う場面が自然と生まれるだけでなく、異なる文化的背景を持つ子どもたち同士がお互いに協働することで多様性を尊重する態度や、柔軟な思考力も育まれると期待しています。指導は、日本人とネイティブの外国人教師の2人体制。英語の学習に不安を抱く子どもに対しても丁寧なサポートを行い、安心して学べる環境づくりに努めています。

——スタートして数カ月、子どもたちの様子はいかがですか。

1年生から6年生まで、各学年に20数名が在籍するクラスが1つずつあります。24人が入学した新1年生は、日本人が17名、そのほかに中国、台湾、アメリカにルーツを持つ児童6名と帰国児童の日本人児童1名が学んでいます。

国際クラスではネイティブの先生がノーマルなスピードで話していますが、子どもたちは積極的に英語でいろいろなことを理解しようとする姿勢が見て取れます。また、英語での指示をすぐ行動に移す様子もたくさん見られますので、今後が非常に楽しみです。

——ともに学ぶ日本人児童にも、得るところは大きそうですね。

英語だけではなく日本語も用いる授業の中で、日本語がまだ心もとないクラスメートへの思いやりなど、お互いに対する配慮や相手意識が育まれるのではないかと考えています。将来的に、日本人と海外からの子どもたちがともに生活する、その土台づくりにつながっていくのではないのでしょうか。

教育学部附属小学校 国際クラス

多国籍の児童が混在するクラスで育む 思いやりや多様性を尊重できる心

教育学部附属小学校では、国立大学附属小学校としては全国初となる、英語のイマージョン教育を柱とした国際クラスを創設しました。1年生から6年生まで、日本人を含む多国籍の児童たちが学習する国際クラスについて、塩村勝典校長に話を伺いました。



——国際クラスを担当する先生方はいかがでしょう。

国際教育プログラムの運営等を担う国際教育コーディネーターの肩書を持つ人材が、本校に9名在籍。各教科等の授業は、彼らと、教員免許を持つ日本人教員がチーム・ティーチングの形で行います。国際教育コーディネーターは7名が外国籍で、日本人が2名。みなさん全員とてもやる気のある方々ばかりで、子どもたちの成長に寄与しようという熱意が伝わってきます。

一方で、英語で日本の学習指導要領に沿った授業が提供できる人材の確保は本当に難しいと感じています。熊本大学教育学部の共同教員養成課程に設けられた「国際枠」のように、そういった人材を輩出する取り組みも始まっていますから、そこで学んだ方たちが当校の国際クラスでイマージョン教育の指導法を身につけ、それを全国の公立学校に広げていく。そういった役割も本校が果たしていけるのではないかと考えています。

——今後の展望は。

国際クラスと一般クラスは分かれて授業をしていますが、同じ教育学部附属小学校であり、一体感は重要。交流授業のほか、体育祭や音楽祭は全校一緒に実施します。また、国際クラスだけで英語を使うのではなく、一般クラスでもどんどん英語を使う場面を増やしなが、学校全体にグローバルな視野が広がっていく教育を行っていききたいですね。そして、本校のイマージョン教育が、熊本県内だけではなく全国の先駆けとなり、モデル校の位置づけになれるよう、頑張っていきたいと思っています。



2026年3月に竣工した国際クラスが学ぶ国際棟

熊本大学の 防災・減災研究最前線

今年は、熊本地震から10年の節目の年。熊本大学で進められている、
防災や減災に関する様々な研究や取り組み、
そして、自然や災害の仕組みそのものを知るための研究をご紹介します。

自然災害が頻発する今、考えたい 日常と非日常を「分けない」備え

自然災害に備えることは大切ですが、災害という非日常を常に意識し緊張しながら日々の生活を送ることは不可能です。そうではなく、日常と非日常を分けず、普段の快適な暮らしがそのまま備えになる環境を作ることが、防災や減災につながる。そんな考え方のもとで公共空間デザインの研究を進めているのが、星野裕司教授です。

くまもと水循環・減災研究教育センター
工学部土木建築学科
景観デザイン研究室
星野 裕司教授
Yuji HOSHINO



公共空間を 自然と人がつながる場所に

私の専門は、土木構造物や公共空間のデザインです。私たちの生活に不可欠な道路などのインフラにおいて大切なのはもちろん機能性ですが、それに加えて、使い心地や居心地の良さも備えたものにするにはどうすればよいかという研究を進めています。

その中で、自治体と協働している取り組みが、防災・減災に関わる公共施設のデザイン。たとえば防災施設として、川岸に高い堤防を作ったとします。しかし堤防は、洪水の頻度を減らすことはできても洪水をゼロにはできません。365日のうち1日あるかないかの洪水危機のために、人と川を分断する無味乾燥な堤防を作るなんて、もったいないこと。そうではなく、洪水のための施設だとしても、普段から人が楽しみ活用できることが大切だと思います。

これまで公共の防災・減災施設は、自然と人をできるだけ隔てるものとして計画されてきました。しかし、堤防で隔てられ普段から川の様子を見ていない人が、非常事態に適切な判断や行動ができるでしょうか。防災や減災のためには、災害を起こすかもしれない自然に日常的に触れていることが大事です。それを可能にする施設が、公

共空間の価値を上げつつ災害への備えにもなる。私はそれを、自然と人間をつなぐインターフェースという言葉で表現し、研究し実践しています。

防災力を高め、より快適になった 白川河川敷「緑の区間」

私の研究室が20年前から参画している一例が、熊本市の白川河川改修事業。熊本市中心部にある大甲橋と、約600m上流にある明午橋の間、通称「緑の区間」と呼ばれる河川敷の整備事業です。白川は周囲の土地よりも高いところを流れる川で、昭和28年6月の「6・26水害」では甚大な被害を出しました。しかし様々な事情で整備ができず、ようやく改修事業がはじまったのが約20年前です。

実施されたのが、川が流す水量を増やすため川幅を拡げる工事です。私は、もとの川岸に生えていた木々を移植し、新しい河川敷を緑豊かな散歩道とする計画や、越水を防ぐ堤防の計画に協力。公園などをデザインする時は、普通は人が歩く位置を決めてから木々を配置するのですが、ここでは先に木を移植し、その後、道のデザインを決めました。森の中で人が歩くことで自然と道ができる、そんなイ



川幅を拡げる工事で移植された大楠2本。移植は、江戸時代からある「立曳き」と呼ばれる方法で時間をかけて行われ、大きく張った枝を切り落とすことなく、そのままの姿で移され今も生き生きと葉を茂らせています

メージです。堤防も、ただのコンクリート壁ではつまらないので、森の間伐材を使ってコンクリート表面に木目をあえて転写し、味わいができるよう工夫しました。

この堤防には、人が河川敷へ降りるためのゲートが2カ所設置され、普段は開放されています。しかし、洪水の危険がある時には閉めなければならない、閉め忘れというヒューマンエラーの危険性と背中合わせ。しかしこの地域の消防団が、自分たちが管理すると言ってくれたんです。実は、防災・減災施設には普段の手間がかかることも大切。防災施設に何も手がかからないと、逆に人の防災意識が薄れてしまいますから。ゲート管理という常にある仕事が、いざという時の初動の速さにもつながります。あえて「手間をかけること」にも、日常と非日常を分けない考え方が込められています。

快適で楽しい日常が 減災につながるが大事

この白川「緑の区間」では、月に一度「白川夜市」というイベントが開催されています。この時は、堤防の穴にライトが吊るされ、堤防の中段にある出っ張りの部分がちょうどよい腰かけに。こういった



白川夜市は、「緑の区間」が生まれたことをきっかけに、この空間をより一層親しめる場所にしようと始まった取り組みです。夜市を楽しむ人々が腰かけているのが堤防の出っ張り部分。木目が転写された堤防は、高さが約2.6m(川岸側)、厚みは下部が約60～70cm、上部は約40cmで、内部には鉄板が地下7mまで埋まっています



道路側から見た堤防。頂部には阿蘇産の溶岩石「鍋田石」があしらわれています



普段は開放されているゲート

イベントは楽しいだけでなく、地域のコミュニティ力を上げ、それが、いざという時の助け合いにもつながります。災害は必ずやりますが、いつ来るかはわかりません。それに備えて緊張しながら暮らすのではなく、「備え」＝「楽しく、居心地がいいモノヤコト」であることが大事だと考えています。

古くは、自然と近しく生きてきたのが日本人ですが、いつしか効率を優先し、自然を力でコントロールしようとする考え方が根付いてしまいました。しかし、災害はそれをはるかに越えてきます。だからこそ今、自然から遠ざかることなく、また、日常と非日常を分けない暮らし方やコミュニティ力の大切が見直されてきています。白川の「緑の区間」も、以前は桜の季節以外誰も足を踏み入れない場所でした。しかし、治水工事を通して人が日常的に行きやすくなる場所にするにはどうすればいいかを考えて工夫をした。そして今、防災・減災力を備えつつ、普段から人が集い楽しく過ごせる場所になりました。防災・減災施設に普段から親しんでいる人々に、その場が災害に備えた施設であることに気付かれないことが私にとっては成功。ただ、私たち研究者も頑張っていることを少しでも知ってもらえたら、それもうれしいですね。

対話し、記憶を繋いで未来を創る

熊本大学ましきラボ

熊本地震で大きな被害を受けた益城町。

被災から約半年後にオープンした熊本大学の「ましきラボ」は、開設から10年、益城町住民の「声」に耳を傾けながら地域の創造的復興のお手伝いを続けています。

誰かの記憶を自分ごとに。 それが、「語り継ぐ」こと

オープン当初からましきラボの運営に携わる、

大学院先端科学研究部の田中尚人准教授にお話を伺いました。



大学院先端科学研究部
工学部土木建築学科
地域風土計画研究室

田中 尚人准教授
Naoto TANAKA

公住民主体のまちづくりに 寄り添い続けて10年

オープン以来、益城町の住民と行政をつなぐサテライトとなっているのがましきラボ。定期的に続けてきた活動の一つが、土曜日午後のオープンラボです。当初は教員2人と学生4人が、ラボを訪れてくる住民の皆さんの、地震の話、復興の話、町に対する思いや希望に耳を傾けていました。まちづくりを行政任せにせず、住民の皆さんも一緒にやる、そのあと押しをするのが私たちの仕事。「やってほしい」という思いだけでは創造的復興は進まないで、自分たちもやっていただく。そのやり方がわからないとおっしゃるときに、私たちがお手伝いしてきました。

オープンラボ以外にも、ましきラボではシンポジウムやワークショップが開催されてきました。熊本地震の翌年には「益城町熊本地震記憶の継承」事業がスタート。町民一人ひとりが語り部となり熊本地震を語り継ぐ取り組みで、その一環として「みんなでツナグ、益城の記憶」があり、最初は発表会のような形でしたが、先日の10回目では、4車線化した県道高森線を住民の皆さんとウォーキング。どんな形であれ「語り継ぐ」ことを目的に活動を続けています。

対話を重ね、自ら考え そして、伝えていく

ましきラボには熊本大学工学部土木建築学科の熊大生も参加しています。土木分野は人と話すことも大切。学生たちにとってましきラボは、どんな状況にある方ともきちんと対話ができる、そのトレーニングの場にもなっています。現在は、熊本地震を経験していない



熊大生も増えました。しかし、そんな彼らが住民の皆さんの体験を対話で紡ぎ、語り継いでいくことがこれからの大切なテーマのひとつです。

しかし、話を聞いてそれを伝えるだけならAIでもできます。そうではなくて、聞いた話をきちんと自分で考えて、その話はなぜその人にとって大事なのか、自分やほかの人にとってはその話のどこが大事なのか、それらを考えたうえで伝えていく。そうすることで誰かの記憶を自分ごとにして、たんなる「教訓」ではなく「生きた教訓」にすることができると思います。そのために大切なのが、人との対話、そして自分との対話であり、住民にとっても熊大生にとっても、その対話を重ねられる空間がましきラボです。土木建築学科で学び社会に出る学生たちには、自分が携わる仕事は安全安心につながる仕事であることや、まちづくりにおいて日常と非日常をつなげることを意識できる技術者になってほしい。だからこそ、学生のうちに住民の方々の話を聞ける機会を大事にしてほしいですね。

トライ&エラーを繰り返せるのが大学 困難にも食らいつき、あきらめない

最近「災間」という言葉が使われています。私たちは日常と日常の間に災害があると思っていますが、そうではなく、災害と災害の間に日常があるという意味だそうです。これだけ災害が頻発すると、一般の人たちも、日常は次の非日常までの猶予期間と考えないといけない時代になったのかなと思います。ただ、日常にいつも非日常を考えておくのは結構な体力を必要とすることだと感じています。

これまでではあり得なかった、そしてあってはならない自然災害が起こり始めているのが、今私たちがいる世界であり、そこに対応するのが私たち大学の役割。目的を決めてそれを遂行するだけなら、AIがやればいいと思います。でも、現場で皆さんの思いを聞いて、予測したことと違うことに意味を見出すことができるのが私たち人間であり、そんなトライ&エラーから自分たちらしく学ぶことができるのが大学です。困難にも食らいつき、みんなであきらめずに進み続けたいと思っています。

田中准教授の研究室で学びながら、ましきラボの活動に参加している
大学院生の中村勇仁さんにも話を伺いました。



自然科学教育部土木建築学専攻
博士前期課程1年
地域デザインプログラム地域風土計画研究室
中村 勇仁さん
Hayato NAKAMURA

住民との対話で実感する 日常という奇跡

ましきラボでは、SNSでのオープンラボ開催の告知、住民の皆さんとの対話、記録、ラボのFacebookへの投稿などを学生が担っています。住民の方からの話を聞いていると、日常がどれほど奇跡であるかを感じます。私は北九州市出身で被災経験はないのですが、住民の方々との対話を繰り返すうち、どこか他人事だった自然災害を自分事として捉えられるようになりました。将来は建設コンサルタント企業でODAに関わる仕事をするのが決まっていますが、防災や減災意識があまりない国や地域で自分に何が伝えられるのか。それを今、ましきラボで学ばせてもらっていると思っています。

大学院生時代からましきラボに携わり、現在は、益城町に「復興まちづくりパートナー」として雇用され、
益城町の復興に関わる様々な業務を担っているのが吉海雄大さんです。



ズトチデザイン代表
益城町復興まちづくりパートナー
熊本大学 学外協力研究員
吉海 雄大さん
Yuta YOSHIKAI

ましきラボに参加以来 人生の3分の1を益城町で

2011年に東日本大震災が起こったとき、私は高専の学生でした。何もできない自分にも何かしさを感じたことを今も覚えています。熊本地震では自分が被災し、その直後から益城町の現場に関わらせてもらいました。大学院の博士後期課程での研究は、ましきラボと益城町の復興がテーマ。その後もいろんな縁をいただいて一生懸命活動していたら、いつのまにか益城町の一員になっていました。すでに、自分の人生の3分の1の期間を益城町と過ごし、益城町の皆さんに育ててもらったようなものだと思っています。

災害の被災地ではいろんな専門家が支援をしますが、一つの専門性だと、関わるができる期間が限定的。でも私はましきラボという組織に所属したことで、切れ目なく様々なプロジェクトに関わることができ、町や住民の皆さんと協働することで一つの計画やプロジェクトに一貫して携わることができた。それに手ごたえと、長く関わる意味や継続する意義を感じられて、今まで続けてこれたんだと思います。



オープンラボ当日、ラボを訪れた益城の住民の皆さんから様々な意見を傾聴



2026年3月20日に実施された「MASHIKI 記憶の継承ウォーキング」。4車線化が完了した県道高森線を歩きました

■吉海さんPROFILE

熊本地震発災時は博士前期課程の大学院生で、ましきラボ開設時から活動に参加。その後、大学の研究員や高専の教員など立場は変わりながらもましきラボに関わり続け、2022年4月から益城町の地域おこし協力隊に。2025年度から名称が復興まちづくりパートナーに変わり、引き続き職員として活動中です。



ワークショップを実施中の吉海さん

益城町では今、人口が熊本地震後V字回復し、地震前とほぼ同じ状況に戻りました。町全体で取り組んできた復興のノウハウは、ほかの被災地の希望になるのではないかと考えています。益城町でいい仕事ができたら、それを記録し伝えていくべき。この先、益城町をより盛り上げつつ、そんな復興のノウハウを社会に還元していくことができればいいなと考えています。

～吉海さんから大学生&高校生の皆さんへ～

学生時代の恩師の、大都市よりも地方都市で起こっていることのほうが、実は最先端なんだという言葉が印象に残っています。熊本地震を経験し、そこから10年で大きく変わろうとしている熊本にも先進事例が詰まっています。その現場に触れる機会が多いということは、チャレンジする機会も多いということ。新しいことに飛び込める可能性がたくさんあるのが地方の魅力だと私は思っています。

熊本大学「くまもと水循環・減災研究教育センター」所属の先生お二人から、減災に関わる工学および理学研究を紹介します。

■橋梁技術研究

うまく壊して揺れを逃し 橋全体の崩落を防ぐ 「ノックオフ」

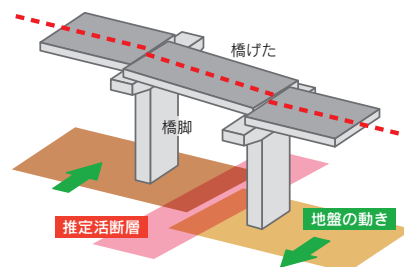


くまもと水循環・減災研究教育センター
減災型社会システム部門
松村 政秀教授
Masahide MATSUMURA

壊れ方をコントロールし 災害時でもライフラインを確保

橋には、川や谷にかかっている橋もあれば、高速道路や新幹線の高架もあります。人やモノが通るための機能のほかに、電気や水道、ガス、光ファイバーなど、私たちのライフラインをつなぐ役割も担っているのが橋。地震などが起こった時は緊急車両を通す必要もあり、橋は、発災直後でも使えるようにしておくことが不可欠です。ということは、多少壊れたとしても完全に崩壊しないようにすること、また、壊れても迅速に修復ができることが必要であり、そのためには、壊れ方をコントロールする、という考え方が大切になってきます。

私の研究では橋という土木構造物の損傷制御、つまり橋の壊れ方をコントロールする「ノックオフ」と呼ばれる仕組みを考えています。「ノックオフ」は、小さな揺れのうちは橋脚と、人や車が通る橋げた部分をつなぐ部分を支えますが、揺れが大きくなりある程度以上の力が加わると、あえて壊れて橋脚と橋げたのつながりを外して揺れを逃し、橋全体の崩落を防ぎます。想定より早く壊れても遅く壊れてもだめで、壊れるポイントをうまくコントロールすることが大事。熊本地震で崩落した阿蘇大橋は、新阿蘇大橋として架け替えが終了していますが、この新阿蘇大橋の国道57号側の2本の橋脚の間には断層があるため、「ノックオフ」が取り入れられています。そのほか、関西国際空港連絡橋の耐震補強にも、「ノックオフ」技術が取り入れられています。



2021年に完成した新阿蘇大橋
国道57号に近い橋脚2本に「ノックオフ」が取り入れられています(松村教授提供)

自分が暮らす土地を知っておく それが非日常への備え

「ノックオフ」は橋の崩壊を防ぐための仕組みですが、地震に対して100%大丈夫というわけではありません。海や川の堤防も、あるから安全なのではなくて、そもそも私たちはそれらが必要とされる場所に住んでいるということ。建物も土木建造物も同じで、耐震設計されているから安心と考えるのではなく、それが必要な場所に私たちは暮らしているという認識を持ち、想定を超える地震が起きる可能性にやはり備えておくべきだと私は思います。

そういった考え方をわかりやすく伝えるのも大学の役割。私が所属する減災型社会システム部門では、一般の方々を対象に年10回ほど「サイエンスカフェ」を開催しています。「自分が暮らす土地はどうやってできたのか」、「ここになぜ橋があるのか」など、普段目にしているのに意識していないようなことを改めて学んでいただいています。「自分が暮らす土地を知る」ことの大切さを一般の方々へ発信しているのがサイエンスカフェです。

熊本は、熊本地震や豪雨災害の被害を目の前で見、「これまでのやり方では対応できなかった」事実をリアルに受け取れる場所。大丈夫だと思ってつくっていたけれど、壊れてしまった。じゃあ、次はどう対応していくのか。そこから得られた成果は、熊本県以外の場所にも生かす、その役割を担うのが熊本大学だと考えています。



サイエンスカフェ
模型を使って雨や地震などの自然現象を見る実験や、熊本地震で被害を受けた阿蘇地方を歩くことも。次の開催は、くまもと水循環・減災研究教育センターのHPをご覧ください



ノックオフの仕組みが働いた橋げたの想定図

ある程度の揺れになると橋脚と橋げたを繋ぐ部分が壊れます。そのため、橋脚が立つ地面の断層がずれても橋脚や橋げたは損傷せず橋の表面はつながったまま維持でき、緊急車両などの通行が可能になります

■火山研究

過去の噴火を詳しく知れば むやみに恐れず 火山と向き合える



くまもと水循環・減災研究教育センター
減災型社会システム部門
宮縁 育夫教授
Yasuo MIYABUCHI

噴火の特徴や危険範囲を把握し いざという時に備える

日本は、狭い国土の中に100個ほどの活火山がある世界有数の火山国で、毎年どこかで火山が噴火しています。私が専門とする火山学の最終目標は、いつ、どこで、どんな噴火が起こるかを予測できるようにすること。しかし、現時点では高精度の噴火予測は難しい状況にあります。

ただ、いつ噴火するということはいえなくても、その活火山はどんな特徴を持っていて、過去にどんな頻度で、どんな噴火をしていて、それがどれくらい続いたかなどの情報は、過去の噴火から読みとることができます。それを詳細に調べ解析しておけば、その火山が将来いつごろ噴火する可能性があるのか、または噴火の可能性はないのか、噴火するとしたらどれくらいの範囲が危険なのかなどを予測することが可能になる。そう考えて研究を進めています。

予知はまだ難しいけれど 噴火パターンの予測は可能

具体的な方法の一つが地質調査です。私はおもに阿蘇火山をフィールドとしていて、自分で地面を掘ることもあれば、工事現場などで現れた地層を調べることもあります。たとえば過去に大きな噴火があったときの地層を見て、もし土の上にいきなり厚い火山灰や噴石などの地層があれば、いきなり大きな噴火が発生したと推測できます。しかし、そういった厚い噴出物の層と土の間に火山灰の層が挟まっていれば、その噴火は小規模な火山灰噴出から始まり、だんだん大きな噴火に移行していったことがわかります。そういった過去の噴火のパターンをいくつか把握しておくことで、たとえば将来阿蘇火山で大き



阿蘇火山中岳でよく見られる「灰噴火」という噴火様式(宮縁教授提供)



北海道にある屈斜路湖は日本最大のカルデラ内にできた湖(宮縁教授提供)

な噴火が始まったとき、今回はパターンAでいきそうだとか、パターンBになりそうだとか、8千年前に起こったパターンCの推移をたどる可能性があるとか、そういったことがわかれば、むやみに恐れるのではなく、災害を軽減するための対策を考えることができます。そうしたことをめざして、日頃から火山灰まみれになりながら調査しています。

火山がつくる見事な景観も その成り立ちを知って、さらに楽しめる

台風も地震も、そして火山の噴火も、自然現象は止められません。しかし、命を救い被害を小さくすることはできます。

2018年、群馬県の本白根山が噴火しました。実は当時、噴火しそうだといわれていたのは別の場所で、火山研究者は本白根山が噴火すると思っていたいなかった。だから観測体制も充実していませんでした。噴火後に研究者たちが本白根山の周辺を調べたら、過去に結構噴火していたことが判明。もちろん、観測体制がしっかりしていても噴火の予兆を捉えられなかったかもしれません。でも、過去に何度も噴火していることがわかっていたら被害を小さくすることができたかもしれない。私の研究は基礎研究ですが、将来的には人の命を守ることにつながれると信じています。

火山国である日本にはもちろん、世界にも火山の噴火によってつくられたすばらしい景観がたくさんあります。しかし、そこが噴火の跡だと、どれほどの人が知って訪れているのでしょうか。景色を見に行く場所がどんな成り立ちでできたところかを知っておけば、より安全に景色を楽しめます。さらには、自分が暮らしている土地の、その成り立ちを知っておくことは、自然災害時にどんな行動をとるべきか、より良い判断につながります。そういったことを発信していくことも、私たち研究者の役割だと思っています。

阿蘇火山の噴火を記録する地層断面(宮縁教授提供)

火山の噴出物が堆積した阿蘇カルデラ周辺の地層。色の違いは、水蒸気噴火や多量の軽石・火山灰を噴出する爆発的噴火など、噴火スタイルの違いを示しています。噴火した年代は、堆積物の炭素年代から把握。「阿蘇火山は、過去の噴火も現在の噴火も、両方研究ができる素晴らしいフィールドです」と宮縁教授。

脳はなぜ、記憶したり忘れたりできる？ DNA・RNA の特殊構造体から疾患の解明を目指す



熊本大学発生医学研究所・ゲノム神経学分野は、塩田倫史教授が率いる研究室。DNAやRNAがつくる特殊な立体構造に注目し、「私たちがどのように記憶し、なぜ一人ひとり異なる個性を持つのか」、そして「その仕組みが乱れると、なぜ神経の病気が起こるのか」を明らかにする研究を行っています。

DNAの一般的な「二重らせん構造」は、「B型DNA」と呼ばれます。しかし実際には、DNAやRNAは細胞の中でさまざまな形に折りたたまれ、左巻きのらせんや三重鎖、四重鎖など、通常とは異なる構造をつくる場合があります。こうした特殊な構造は「非B型核酸構造」と呼ばれ、遺伝子の働きや神経細胞の活動、さらには神経疾患とも関係している可能性があるとして注目されています。その中で塩田研究室が特に研究しているのが、「グアニン四重鎖(G4)」という構造。DNAやRNAの中でもグアニンという塩基が多い部分で形成される特殊な立体構造です。研究室で

は、G4が神経細胞の発達や情報伝達、記憶の形成にどのように関わっているのかを調べています。また、G4の異常が神経疾患の発症につながる仕組みを解明し、新しい治療法の開発につなげる研究も進めています。

近年、塩田研究室は、RNAのG4構造が神経変性疾患に関わるタンパク質の凝集を引き起こす「足場」として働くことを発見しました。たとえば、パーキンソン病に係るα-シヌクレインというタンパク質が、RNAのG4構造を足場として集まりやすくなることを明らかにし、2024年に世界的な学術誌『Cell』に掲載。また、アルツハイマー病に係るタウタンパク質についても、RNAのG4構造とカルシウムイオンが協力してタンパク質の性質を変化させることを報告しています。これらの研究成果は、DNAやRNAの特殊な構造を標的とした新しい神経疾患治療法の開発につながる可能性があります。



様々な器具や試薬が並ぶラボ



お互いに意見を仰ぐこともある研究室仲間

塩田教授に聞きました！

ゲノムの特徴と脳の働きを結び付けて考える、ユニークな研究室

私たちの研究室では、「脳はなぜ記憶できるのか」「なぜ忘れてしまうのか」「どうして脳の働きが変わると病気につながるのか」といった、身近だけれどとても大きな疑問に取り組んでいます。その手がかりとして注目しているのが、DNAやRNAの少し変わった形。特殊な核酸の形が、脳の働きや記憶、さらには認知症やパーキンソン病のような神経疾患にどのように関わっているのかを調べています。

生き物によってかかりやすい病気や脳の働きには違いがあり、たとえば、マウスはヒトと同じような認知症を自然には起こしにくいことが知られています。こうした違いの背景には、ゲノムや核酸の構造の違いが関係しているかもしれません。ゲノムの特徴と脳の働きを結びつけて考えることが、私たちの研究室の大きな特色です。

研究というと難しく感じるかもしれませんが、出発点はとてもシンプル。「なぜだろう」と思う気持ちが研究の入口です。勉強しているときに「どうして覚えられないのだろう」「なぜすぐ忘れてしまうのだろう」と感じることもあるかもしれません。そのような日常の疑問も、深く考えていくと脳の仕組みを知る研究につながっていきます。

学生の皆さんには、まず研究を楽しんでほしいと思っています。実験をして、結果を見て、仲間と話し合いながら考える。その過程で、論理的に考える力や、自分の考えを人に伝える力が自然と身につけていきます。研究は一人で進めるものではなく、周りの人と協力しながら進めるもの。研究室で身につけた力は、将来どのような道に進んでも必ず役に立つはずです。



塩田 倫史教授
● 熊本大学発生医学研究所
ゲノム神経学分野

実験結果を 世界で一番目に見る そんなワクワクが 研究の醍醐味

博士課程 1年
工藤 健太さん
Kenta KUDO



高校の授業で遺伝子の仕組みに興味を持ちました。そのほかに、脳や神経についても研究してみたいと思っていたら、その両方をやれるこの研究室を知り、自分にぴったりだと思い選びました。

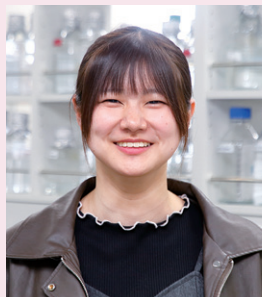
現在の研究テーマは、canvasという遺伝性の希少疾患のメカニズム解明。RNAがゴミのように蓄積されるのではないかと予想を立てて実験を進めています。実験漬けの毎日、思うようなデータが出なかったり、一度やった実験をもう一度やると違う結果が出たり、大変なことも多いです。一方で、その実験結果を見られるのは自分が世界で一番目という、そのワクワク感や喜びが楽しみの一つ。まだ将来を具体的には決めていませんが、研究を続け、社会に貢献できる人材になりたいです。



細胞の培地交換をする工藤さん

塩田教授との ディスカッションが 研究室選びの 決め手に

学部 4年
竹添 美咲さん
Misaki TAKEZOE



学部3年生で研究室に配属されるとき、いろいろな研究室を見て回った中で塩田教授とのディスカッションが印象的だったことや充実した実験設備に「ビビッ」ときて、この研究室を選びました。現在は、脳内のミエリンベースックプロテインというタンパク質に着目しその機能解析を行っています。これが卒論テーマになる予定で、卒業後は大学院に進学し研究を続けたいと考えています。

研究室に配属されてまだ1年ですが、まったく経験がなかった実験も、その計画を立てる力や、論文を読んで必要な情報を集める力などがついてきたと思います。わからないときに人に聞くということも同じく「力」の一つ。これも、塩田研究室で培われていると思っています。



顕微鏡をのぞく竹添さん



研究室の外で親睦を深める機会も

メンバー構成
教授1名、准教授1名、助教1名、学振PD1名、大学院生4名(博士課程1名、修士課程3名)、学部生7名、秘書1名

学位テーマ
■ RNAグアニン四重鎖によるTauタンパク質凝集と神経軸索機能障害機構の解析
■ 小脳性運動失調・ニューロパチー・前庭反射消失症候群(CANVAS)におけるRNA高次構造と神経機能障害の関連性

卒論テーマ
■ ミエリン構成タンパク質myelin basic proteinのエピゲノム制御解析
■ DNAリビート伸長病に対する疾患アレリック特異的な転写阻害薬の開発
■ α-シヌクレインの核内封入体形成による神経細胞死機構の解明

卒業生 ジャーナル



※敬称略

国内外の様々な分野で活躍する熊本大学の卒業生たち。
彼らはどんな学生時代を過ごし、どんな夢を持ち社会に出て、
今、どんな世界で頑張っているのでしょうか。

薬学部



山田 茉莉乃

Marino YAMADA

■勤務先
大分市医師会立アルメイダ病院 薬剤部(大分県)
■卒業
薬学部薬学科／2020(令和2)年3月卒業
■Profile
1995(平成7)年生まれ。大分県別府市出身。大分県立別府鶴見丘高等学校卒業。趣味はホットヨガ。休日はドラマや映画を観たり、おいしいごはんやお酒を楽しんだりしてリフレッシュしています。

就職後もこつこつ勉強し資格を取得 これが、今は大きな自信に

学部3年生で配属された研究室では、DDS(薬物送達システム)について学び、注射剤でしか投与できない薬剤を飲み薬にするための研究を行っていました。問題を解決するための計画を自分自身で立てて実行し発表するという一連のプロセスを経験したことは、社会に出てからもとても役に立っています。

就職は、幅広く学べる場所がよいと考え総合病院を選びました。これまで、総合診療科、整形外科、循環器内科などの病棟担当を経験。最初に配属された総合診療科の病棟で、たくさんの薬を服用している「ポリファーマシー状態」患者さんの薬剤整理の重要性について学び、ポリファーマシー対策の専門家である老年薬学認定薬剤師という認定を取得しました。配属先が変更となってからも担当病棟と関連する分野の勉強を積み重ね、骨粗鬆症マネージャーや心不全療養指導士といった資格も取得。そのおかげで、多職種が関わるチーム医療にも自信をもって取り組めるようになりました。

そんな経験を通して思うのは、人生に無駄な学びは一つもないということ。今何をやりたいのかわからないという方も、視野を広く持ち置かれた環境を活かして今学べる事を学んでみれば、より深く学びたいと思えるものにも出会えるはず。そうなるまでに学んだことや経験は、かけがえのない財産になると思います。

教育学部



坂本 くるみ

Kurumi SAKAMOTO

■勤務先
株式会社熊本放送 メディア総局アナウンス部(熊本県)
■卒業
教育学部小学校教員養成課程／2017(平成29)年3月卒業
■Profile
1995(平成7)年生まれ、福岡県福岡市出身。福岡県立城南高等学校卒業。休日は、おいしい飲食店やカフェ巡り、ドライブに出かけています。年に一度の楽しみは海外旅行。ここ数年はヨーロッパにハマっています。

熊本地震を経験したアナウンサーとして 熊本に貢献したいと熊本放送へ

アナウンサーを意識するようになったのは大学2年生の時。教員養成課程でしたが、中でもアナウンサーにつながる学びを追求したいと、副専攻は国語科を選びました。「どう伝えるかを考えること」は教員もアナウンサーも共通する部分があります。教育実習はもちろん、部活動やアルバイトなど多様な経験をしたことは、今、様々なことに興味を持ち物事を多面的に考えることに役立っていると思います。

4年生になった4月に経験したのが熊本地震で、「死ぬかもしれない」という恐怖の次に感じたのは、東日本大震災ではもっと恐ろしい思いを東北の人たちがしていた、ということでした。「命を守るアナウンサーを目指そう」と思うようになった、私の人生の中でも大きな出来事です。卒業後他県の局でもアナウンサーを務めました。が、熊本地震の被災者の一人として熊本に貢献したいと思い熊本放送へ。人命に直結する気象災害を目の当たりにする中で、アナウンサーとして確信を持った言葉を発したいと、2023年に気象予報士の資格を取得。現在は、RKKテレビ『NEWSゲツキン』で気象キャスター、中継リポーター、定時ニュースやラジオ番組MCなど幅広い仕事に携わっています。とても刺激的で楽しい仕事である一方で、人命に関わる気象予報士の責任の重さと近年の異常気象に対応する難しさも感じる毎日です。

工学部



甲斐 弘樹

Hiroki KAI

■勤務先
東京エレクトロン株式会社 開発部(熊本県)
■卒業
工学部機械システム工学科／2020(令和2)年3月卒業
大学院自然科学教育部博士前期課程機械数理工学専攻／2022(令和4)年3月修了
■Profile
1998(平成10)年生まれ。熊本県熊本市出身。熊本県立済々黉高等学校卒業。休日はカフェ巡りをすることが多いです。最近、昔やっていたドラムをまた始めました。

自分が設計した半導体製造装置が 「世界で使われている」ことにやりがい

学部4年生で溶接に関する研究室に入り、溶接だけでなく機械学習を用いた画像分析を研究。工学系分野で働くにはより専門的な知識と研究の経験が必要と感じ、大学院にも進学しました。その頃抱いていたのが、将来は身近なものをつくる仕事がしたいという思いと、地元で働きたいという思いです。自動車、携帯電話、家電など、あらゆる電子機器の中に使われている半導体を製造する装置の開発に携われば、抱いていた「身近なものをつくる」という思いを実現できると考え、半導体製造装置の開発を熊本で行っている東京エレクトロン株式会社に就職しました。

現在は開発部で、半導体製造装置の中でも塗布・現像装置の開発・設計を行っています。弊社の製造装置の中で世界シェア9割を担っている装置であり、そのシェアを保つために顧客のニーズに応えられる最先端技術の開発に取り組んでいます。毎日が設計、試作、検証、報告の繰り返しであり、大学の研究の経験が大きく役立っています。顧客の要求する技術のレベルは非常に高く、またスピードも速いです。そこについていくことにとても苦労していますが、自分が設計した装置が、世界中の工場で使われているという醍醐味を感じられる仕事だと思っています。

医学部



吉田 実奈

Mina YOSHIDA

■勤務先
熊本労災病院 消化器外科(熊本県)
■卒業
医学部医学科／2023(令和5)年3月卒業
■Profile
1997(平成9)年生まれ、熊本県熊本市出身。尚絨高等学校卒業。昨年出産し、子育てと外科医の両立を目指して頑張っています。韓国や日本のドラマ、そして読書も好き。中山祐次郎先生の作品『泣くな研修医』シリーズは何回も読みました。

人の命に直結する厳しい仕事 だからこそ得られる大きな喜び

中学時代から思い描いていた夢は、生命に関係する研究者になることでした。地元の熊本大学に小さいころから行きたいと思っており、研究者としての道を進むとしても医学博士などの資格があったほうがよいと聞き医学部へ進学。そこで臨床を学ぶうち、研究者ではなく臨床医となることを考え始め、最終的には、臨床実習で興味を持った消化器外科医としての道に進む覚悟を決めました。昨年は熊本大学病院で研鑽を積み、今年から、熊本労災病院に勤務。先輩医師に学びながら、鼠径ヘルニアや胆嚢結石などの手術を執刀しています。医師は、自分の無知が人の命に直結する、決して間違いが許されない仕事。その分、自分が担当した患者さんが元気に帰っていく姿を見ると、大きなやりがいと喜びを感じます。

高校時代には、勉強をはじめ努力しないといけなことがたくさんあると思います。夢をあきらめようと思う時もあるかもしれませんが、それでも、そこに向かって努力した時間は大切にしてください。将来仕事をすれば、厳しく大変なことはたくさんあると思います。でも、学生時代に頑張った経験が、それを乗り越えさせてくれます。もし医療職を目指している方がいれば、一緒に働ける日を楽しみにしています。

法学部



正木 堅

Ken MASAKI

■勤務先
九州運輸局 熊本運輸支局(熊本県)
■卒業
法学部法学科／2020(令和2)年3月卒業
■Profile
1997(平成9)年生まれ、福岡県筑紫野市出身。福岡県立筑紫丘高等学校卒業。趣味はサイクリングと緩めの登山。大学卒業ぶりに熊本に戻ってきたので、手軽に登れる山を開拓中です。

乗り物で移動することが好きで 交通行政に携わりたいと九州運輸局へ

高校時代から漠然と公務員になりたいと思っていました。熊本大学法学部では法律だけでなく経済も学べると知り、公務員を目指すのに適していると思い進学しました。学生時代の一番の思い出は、サイクリング部でのサークル活動。ほぼ毎日部室に行くほど大好きで、長期休暇のときには、サークルのメンバーと野宿で自炊しながら自転車旅を敢行したことも。過酷な経験もしましたが、今となってはとても良い思い出です。

乗り物で移動することが好きで、交通行政に携わりたいとの思いから九州運輸局を志望しました。現在は自動車の登録を行う部門に勤務。新規登録や名義変更などに携わっており、相続や法人の破産・清算などでは、民法や会社法に則った手続きが必要で、大学時代に学んだ知識や経験が生かされています。この仕事は、自分の仕事が微力ながらも地域の交通の役に立っていると感じられることが喜び。

これから大学に進学する皆さんは、大学という人生最後の学生時代に、仲間とともにやりたいことに好きなだけ熱中してほしいと思います！

文学部



松井 慧

Kei MATSUI

■勤務先
五ヶ瀬町役場 町民課 地籍調査係(宮崎県)
■卒業
文学部総合人間学科社会人間学コース倫理学履修モデル／2016(平成28)年3月卒業
■Profile
1993(平成5)年生まれ、宮崎県五ヶ瀬町出身。宮崎県立延岡高等学校卒業。学生の頃から変わらず映画好きで、熊本にもちょくちょく映画を見に来ています。地元の役場に勤めつつ、浄土真宗本願寺派の僧侶としても活動する日々です。

社会調査実習で、仲間と協力し 何かを成し遂げる楽しさを知った

いずれは実家の浄土真宗の寺院を継ぐと思っていましたが、仏教とは違う世界を見たい思いもあり、様々な学問に触れられる文学部総合人間学科に進学しました。最も思い出深いのは3年生での社会調査実習。東日本大震災で熊本へ自主避難された方々にインタビュー調査を行い、自主避難という行動の社会的背景を多角的に論じた調査報告書を、ゼミメンバーとやっとの思いで完成。「生みの苦しみ」をこれでもかと味わいましたが、論理的に物事を考察してそれを文章としてアウトプットし、誰かに伝えることの重要性を学びました。なにより、皆と協力して何かを成し遂げることの楽しさ・美しさをあれほど感じたことはありません。現在は町民課地籍調査係に配属され、「土地の戸籍」と言われる地籍を確定する調査を仰せつかっています。計画的かつ周到に事前準備をし、委託業者との調整を経ながら進捗管理を行う大変さもありますが、着実に前進していることが実感できるやりがいある業務です。

私は、個人の「可能性の幅」は、人生における各場面の選択によっていかようにも広げることができると思います。大学はそんな「可能性の幅」を広げられる最良の場。多くを学び、多くの人と触れ合って、「楽しかった!」と振り返ることのできる充実した大学生活を送ってください。

理学部



東 征史朗

Seishiro HIGASHI

■勤務先
株式会社ティーユーシー システム部 システム開発課(熊本県)
■卒業
理学部理学科(地球環境科学)／2025(令和7)年3月卒業
■Profile
2001(平成13)年生まれ。熊本県熊本市出身。熊本県立第二高等学校卒業。Creepy Nutsにはまっていて、毎日寝る前にCreepy Nutsの曲だけを繰り返し聴いています。

高校では学ばない地球環境科学に惹かれ 卒業研究ではひたすら介形虫と向き合った

一学科制の理学部で専攻を決めるとき、高校では学ばなかった地球環境科学に最も惹かれて選択しました。地球環境科学は壮大な宇宙や地球の営みを研究するものと想像していましたが、小さいものが環境の変化に鋭敏に反応すると知ったことで興味を抱き、小さなものを扱う研究室へ。その中で介形虫を対象にしたのは「かわいいから」という理由です。卒業研究ではひたすら介形虫の殻を集めました。研究対象とした熊本港周辺の海域だけでも様々な種類の介形虫があり、それぞれ異なる殻の形状をしているので、種類ごとに仕分ける作業は楽しかったです。

勤務先の企業は、主に自治体のお客様に、設計積算業務を効率化するためのソフトウェアを提供しています。私は、お客様から寄せられた要望や障害の報告をもとに、プログラムの設計図であるソースコードの改修を担当。卒業研究で、介形虫のデータ集約のためにエクセルの関数を使ってできるだけ楽をしようと試行錯誤した経験が、プログラムをよいものにするために役立っています。ソースは非常に複雑で、目的達成のためにどこを直せばいいか探すのは大変苦労しますが、だからこそ、目的としている動作をプログラムに反映できたときは大きな達成感を得られます。



熊本大学プロモーション動画

熊本大学映画研究部が 熊本大学のPVを制作！

熊本大学公認サークルである映画研究部が制作した、熊本大学のPVがYouTubeで公開されています。制作を担当した監督、映画研究部メンバー、そして出演したお二人に、動画制作の舞台裏と見どころを伺いました。



PVはここをチェック！



監督
陳逸 (チェン・イー) さん
YI CHEN

※熊本大学工学部に留学中、監督として撮影に参加。
現在は台湾の国立嘉義大学農学部景観学科所属

もっともこだわったのは、熊本大学のコミュニケーションワード『創造する森、挑戦する炎』を映像と言葉で具現化すること。学生のリアルな「不安」に共感を呼び起こし、熊本大学が「創造の場」であり、一歩踏み出す「挑戦の勇氣」を受ける場所であることを、同じ学生としての視点から描き出しました。

初監督として自分の想いを形にする挑戦だったため、脚本の設定や絵コンテの構図など、準備段階には膨大なエネルギーを注ぎ込み、試行錯誤を繰り返しました。しかし、仲間と議論を重ねた過程や、撮影に参加してくれたメンバーたちの真剣な姿、そして完成後に視聴者の皆様からいただいたフィードバックに触れ、この制作に携わることができて、本当に良かったと心から実感しています。見終わった後に、皆さんの心の中に少しでも「一歩踏み出す勇氣」が残ればうれしいです。



映画研究部副部長
文学部3年
島村 泰地さん
Taichi SHIMAMURA

私はプロデューサーとして監督が不自由ないように、ロケ地交渉やキャスティングなど、できるだけ監督の要望に応えられるようにすることが仕事でした。この動画は、男女二人の学生が不安を抱えながらも進んでいく、そんなストーリー仕立てになっています。見どころは、ドローンを使って撮影した五高記念館。これから熊本大学を目指す人はもちろん、現役熊大生にもぜひ見てもらいたいと思います。



出演
甲斐 美憂さん
Miyuu KAI

このPVは、最初からがっつりと内容構成を決めていたわけではなく、みんなでアイデアを出しながら制作。出演者としては、たとえば思い切って一歩を踏み出すシーンで、不安もありつつワクワクしている、そんな心情を伝えられる表情に工夫をしました。どこをとっても美しい映像ですが、私は、言葉一つひとつ、みんなで話し合っただけで作ったアフレコで入れたセリフにもぜひ注目してほしいと思っています。



※2025年ミスター熊本大学準グランプリ。撮影時は教育学部4年生
出演
津志田 圭介さん
Keisuke TSUSHIDA

PV出演は初めての経験で、みんながすごく励ましてくれて、何度も撮り直してくれて、演じる力をくれたことに感謝しかありません。こんなに美しいPVを撮ってくださる、さすが映画研究部さんだと思いましたし、こんな機会を与えていただき光栄に思っています。熊本大学の4年間は、仲間に恵まれた場所としてかけがえのないものになりました。



熊本大学メールマガジン登録受付中！

熊本大学のニュースやイベント情報、最新の研究成果、WebマガジンやYouTubeの更新情報等をお届けしています。ぜひ登録ください！

登録方法はこちらをご覧ください



熊本大学公式SNS
熊本大学の最新情報はここから！

X (旧 Twitter)



YouTube



Instagram



広報Webサイト
ウェブマガジンなど
様々なコンテンツを掲載！

Kumadai Now
熊大なう。



熊本大学基金よりお知らせ

熊本大学基金へのご協力に感謝し、心より御礼申し上げます。

No.69 (令和8年1月1日～令和8年4月30日)

熊本大学基金に対しまして、深いご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。皆様からのご寄附は、本学の教育研究の充実、学生支援、環境整備等、幅広く活用させていただいております。今号では、令和8年1月1日から令和8年4月30日までの間に入金を確認させていただきました個人482名、19法人・団体のすべての寄附者の皆様へ感謝の意を込め、ご芳名を掲載させていただきます。また、万一お名前に記載漏れがある場合は、誠に恐縮ではございますが、基金運営室(電話:096-342-3129)までご連絡ください。皆様のご支援とご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げます。※お名前・寄附金額の公開の許可をいただいた方のみ、寄附金額別、五十音順、敬称略にて掲載させていただきます。※()内の数字は、累計寄附金額(万円)、[]内の数字は、累計寄附回数(回目)です。

令和8(2026)年1月

1. お名前・寄附金額の掲載

【500万円】 笠原 慶久(500)
【200万円】 清原 由紀夫(322)
【100万円】 黒木 政秀(900)
【30万円】 甲斐 秀子(30)
【25万円】 古垣 浩一(25)
【20万円】 若林 秀樹(31)
【10万円】 大津 敬一郎(310)
【5万円以下】 阿南 誠一郎(5)
寿山 康久(9)
三浦 正毅(5)
浄住 護雄(50)
鬼ヶ原 浩二(20)
藤本 晴香(4)
宮本 真次(16.3)
倉津 純一(62)
木下 晋介(0.5)
松村 均(4)
渡邊 晶代(3)

2. お名前のみ掲載

荒井 澄子[15]
猪俣 紘一郎[11]
大石 初藤[1]
笠岡 俊志[2]
讃井 早智子[1]
島田 政也[1]
高野 智樹[1]
田中 靖人[1]
筒 寿一[1]
長岡 克弥[1]
西田 拓郎[1]
原 秀和[1]
藤井 慎嗣[4]
杏尾 修一[4]
宮本 健史[1]
八本 幸史郎[1]
山本 真一[1]
荒金 太[1]
植松 重樹[1]
岡島 寛[17]
桐原 健寿[1]
鮫島 正裕[1]
新貝 雄二[1]
高野 義久[2]
田中 涼子[1]
徳田 正博[1]
中島 悠希[1]
西村 克範[1]
日比 泰造[1]
藤瀬 昇[2]
松本 達朗[1]
宮本 健史[1]
矢野 節子[1]
吉川 晟弘[1]
荒木 正[1]
上村 彰博[1]
奥 輝之[8]
毛井 純一[1]
志賀 隆行[1]
神力 悟[1]
田尻 雄大[1]
谷口 雅浩[1]
徳田 正博[1]
永田 雅英[1]
馬場 秀夫[22]
平田 直之[1]
松本 知明[1]
宮本 健史[1]
山口 和也[1]
熊本大学大学院消化器外科学医局一同[1]
安南 泰彦[1]
大石 栄美子[1]
越智 正典[1]
神鷹 卓己[1]
篠原 知也[2]
妹尾 包人[2]
田中 久視[1]
田上 正[4]
中尾 秀樹[1]
西川 毅[8]
早野 恵子[7]
福岡 大祐[2]
牧之段 学[1]
宮島 哲哉[1]
森田 康之[1]
山崎 友紀[1]

3. お名前・寄附金額の掲載を希望されなかった寄附者の皆様

個人117名、1法人・団体

令和8(2026)年2月

1. お名前・寄附金額の掲載

【1億円】 熊本大学生協同組合(10000)
【100万円】 人吉医療センター医局員一同(100)
【10万円】 水野 吉昭(10) 後藤工業有限会社(10)
【5万円以下】 市原 大裕(1) 首藤 剛(15) 富田 正郎(10.5)
内藤 裕(5) 新山 博亮(1) 南崎 天翔(1)
宮本 真次(16.4)

2. お名前のみ掲載

池田 知香子[1]
大石 一[1]
岡 義典[1]
金森 弓枝[1]
齋藤 靖[1]
志賀 有[1]
竹屋 元裕[5]
友瀬 信次[1]
中村 正一郎[1]
奴賀 昌人[1]
布木 周作[1]
松村 道孝[1]
守田 伸一[1]
吉松 慶[1]
上村 司人[1]
大嶋 秀一[2]
岡本 敦也[1]
川口 彩[1]
酒匂 康孝[1]
島田 信也[2]
築地 健次[3]
中熊 正博[1]
中村 太志[2]
野元 理恵[1]
福永 浩之[1]
三浦 里菜[1]
安永 純一郎[1]
医療法人伊東会伊東歯科口腔病院[6]
内野 誠[2]
大塚 芳生[1]
奥 輝之[9]
川口 徹[1]
笹木 隆嗣[1]
嶋永 元裕[3]
嶋地 健次[1]
長倉 祥一[1]
西岡 桃子[1]
波多野 裕二[1]
藤岡 将太[1]
水上 晴美[1]
尹 琬佑[1]
尾池 雄一[2]
大林 純[2]
奥野 雄大[1]
窪田 直人[1]
三宮 準[1]
下川 泰[1]
寺床 輝[1]
仲里 仁史[5]
西川 潤一[1]
原田 明二[2]
松岡 雅雄[1]
村山 伸樹[9]
吉富 寛瑞[1]

3. お名前・寄附金額の掲載を希望されなかった寄附者の皆様

個人59名、1法人・団体

令和8(2026)年3月

1. お名前・寄附金額の掲載

【100万円】 伊藤 裕子(101) 桑野 幸徳(1222)
【50万円】 熊香会(2600)
【22万円】 市橋 俊文(55)
【13万円】 熊本大学医学部医学科後援会(3141)
【10万円】 大河内 彩子(11.5) 坂本 亮二(30)
【5万円以下】 宮本 真次(16.6)

2. お名前のみ掲載

井 史博[1]
勝守 高士[1]
木脇 祐聡[1]
徳永 隆裕[7]
波多野 恭行[43]
矢野 浩夢[1]
医療法人杉村会[5]
大坪 惟子[1]
河野 奈津子[2]
相良 勝郎[13]
中田 智久[1]
堀本 健正[1]
遊亀 千尋[1]
株式会社キューネット[3]
Japan Advanced Semiconductor Manufacturing 株式会社[4]
岡村 英祐[1]
北 昭彦[1]
佐田 英信[8]
南家 貴美代[1]
宮坂 篤[1]
米丸 智浩[1]
株式会社ダイセル[8]
奥 輝之[10]
清原 英雄[2]
重石 光弘[5]
野津原 誠和[1]
両角 光男[10]

3. お名前・寄附金額の掲載を希望されなかった寄附者の皆様

個人34名、2法人・団体

令和8(2026)年4月

1. お名前・寄附金額の掲載

【1億円】 一般財団法人化学及血清療法研究所(24225)
【1千万円】 有限会社KTキャピタル(1000)
【5万円以下】 伊藤 雅浩(15) 近藤 光弘(18)
社会文化科学教育部法政・紛争解決学専攻院生一同(1.6)
春口 孝之(5) 松田 亨(6.5) 眞鍋 聡(1)
萩尾 信敏[3]
宮本 真次(16.8)

2. お名前のみ掲載

浅原 百合子[6]
岡本 哲夫[8]
久保 徳雄[1]
作村 衛士[1]
瀧川 善嗣[1]
萩尾 信敏[3]
古川 幸則[1]
池田 英世[6]
奥 輝之[11]
隈部 孝二[2]
柴山 佳夫[12]
西中村 茂[3]
橋口 廣則[1]
前瀬 啓子[3]
岩下 有紀[1]
清川 英之[2]
児倉 静二[25]
島本 勝士[1]
丹羽 賀和・史子[2]
波多野 恭行[45]
藤本 祝[1]
松崎 孝徳[2]
大坪 邦雄[5]
楠田 靖紀[6]
齊藤 和人[7]
高木 梯子[1]
野村 昌員[2]
藤本 祝[1]
吉澤 博[2]

3. お名前・寄附金額の掲載を希望されなかった寄附者の皆様

個人52名、1法人・団体

基金の取り組み事項については、
基金ウェブサイトに掲載しております。

熊本大学基金ウェブサイト
【URL】<https://kikin.jimu.kumamoto-u.ac.jp/>

熊本大学クラウドファンディング

多くのご寄附・ご支援をいただき、以下のとおり達成いたしました。

プロジェクト名	地図にない日本列島を求めて。 地球の記憶を呼び起こす大航海	プロジェクト名	触れて、感じて、学ぶ未来を 一視覚障がい児の学びを支える教材を全国へ届けたい！ 奈良での展示会出展へのご支援をー
募集期間	2025/12/1(月)～2026/1/29(木)	募集期間	2025/12/1(月)～2026/1/31(土)
寄附総額	1,730,000円	寄附総額	529,000円
寄附者数	57名	寄附者数	34名
ご芳名掲載先	https://readyfor.jp/projects/ostra	ご芳名掲載先	https://www.glocal-cf.com/project/soleil



◎読者アンケートへご協力ください

熊本大学広報誌「熊大通信」では、皆さまからのご意見やご要望、掲載につながる情報提供をお待ちしています。今号からアンケートフォームによる回答となりました。アンケートにご協力いただいた方の中から抽選で5名様に

「オリジナル：付箋・ボールペン」をセットでプレゼントします。



オリジナル付箋



オリジナル
ボールペン

アンケート
フォームは
こちら





キャンパス
ミュージアム
散策

絵・文
松永拓己
大学院教育学研究科
教授・芸術家

山崎記念館

〒860-8556
熊本市中央区本荘1-1-1
Tel.096-373-5988

外観のみ観覧可

交通機関：バス
大学病院前バス停下車 徒歩2分

大医は国を医す。

熊本大学内の小道をゆく。

大学病院前バス停から熊本大学病院側、左方向へキャンパスに入ると、レトロな2階建ての白い建物が目に入る。国の登録有形文化財(建造物)の山崎記念館である。

幾何形と円形が活かされたデコ調デザインを感じる昭和6(1931)年建造の鉄筋コンクリート建築のモダンな作りが印象深い。

もともとは昭和4(1929)年『肥後醫育史』を刊行した山崎正董博士・学長を顕彰し、多くの人の協力により熊本医科大学山崎記念図書館として建てられた。太平洋戦争の最中には空襲で大学校舎と附属病院は焼け落ちたが、奇跡的に本図書館は残った。戦後、熊本大学山崎記念館となる。

『肥後醫育史』は山崎の思いがとてもよく伝わる本である。宝暦6(1756)年の肥後藩の医学学校「再春館」創設話から始まる。国内初の公立の医学教育の始まりと、設立した細川重賢(8代藩主)の賢明さを誇らしく記している。

「すべてを世襲とする藩政時代に於て、独り医業のみは実力を以てその業を継がしめ…肥後の医学が当時に頭角を現したる所以である。」

また、校訓ともいうべき「再春館壁書」についても記載がある。

「一、医の道は岐黄(伝説の帝王 黄帝と、伝説の名医 岐伯)を祖述し、仁術に本づく、故に尊卑を撰ばず、貧富を問はず、謝儀の多少を論ぜず、専本分を守るべき事…」

実に清々しい。医者になる者へ矜持をもたらす間違いのない遥かに高い志が宿っている。医育とはそういう心意気の基で取り組むものであろう。その志と出会えた医学生は幸せである。いや、すべての人へであらうか。

徳富蘇峰が序文を記している。

「…古い人の話に『大医は国を医(いや)す』と云ふ。我が山崎博士の如きも又たこれ医国者の一人であらう。」

医は万民に開かれ一人一人の苦しみを救うものであるのなら、やがて国をも幸に導くことになるであろう。社会すら治してしまいそうな山崎の大医の様相を感じる、そんな山崎記念館である。

